ISSN 2187-1841

千代田区立日比谷図書文化館

文化財ニュース

40 Autumn 2026

特集

日比谷図書文化館開館15周年

～文化財事務室主催（共催）の特別展・企画展の軌跡～



Index

2-4 特集
日比谷図書文化館開館15周年
～文化財事務室主催（共催）の特別展・企画展の軌跡～

5 日比谷ミュージアムガイド
あの人も千代田区を歩いた
～夏目漱石編～

6-7 *Chiyoda* コレクション
内幸町一丁目遺跡から出土した
松香渓焼

8 文化財事務室通信
こんなこともやっています
～文化財調査報告書の刊行～



令和8年11月3日、千代田区立日比谷図書文化館が開館15周年を迎えることを記念し、館内では「江戸文化を、いま楽しむ。」を共通テーマとした様々な展示・イベントを以下のとおり実施します。詳細は特設ページからご確認ください。

期間
令和8年10月31日～12月28日

会場
日比谷図書文化館 各フロア

特集

日比谷図書文化館開館15周年

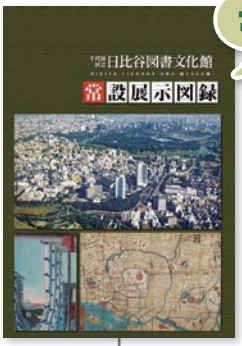
～文化財事務室主催（共催）の特別展・企画展の軌跡～

千代田区立日比谷図書文化館は、平成23年（2011）11月3日に開館し、今年でちょうど15周年を迎えます。元々東京都立日比谷図書館として長年使用されてきた建物を生かしながら、図書館機能と博物館機能を併せ持つ、千代田区立の文化施設としてリニューアルされました。そのうち、博物館機能については、かつての千代田区立四番町歴史民俗資料館から日比谷図書文化館文化財事務室が引き継ぎ、文化財保護行政（文化財指定、発掘調査など）、史資料の調査・研究、講座・展示などの教育普及活動などを担っています。

今回はこの15年間で開催した、文化財事務室が主催（または共催）の特別展・企画展を一覧でご紹介します。



日比谷図書文化館特別展示室風景
（令和7年度企画展「千代田の大奥」）



常設展示図録を刊行

平成23年度

2012/1/17-03/11
特別展
文化都市 千代田
―江戸の中心から東京の中心へ―

平成24年度

2012/07/17-09/02
企画展
東京
―その復興の歴史―

2013/01/19-03/03
特別展
徳川将軍家の器
―江戸城跡の最新の発掘成果を美術品とともに―



2014/07/22-08/31
企画展
千代田の文化財で綴る
江戸・東京の歴史



2014/01/27-03/03
企画展
千代田“新発見”
―新収蔵資料展―

2013/10/26-12/08
特別展
鎌倉と江戸
―中世と近世の武士―



平成25年度

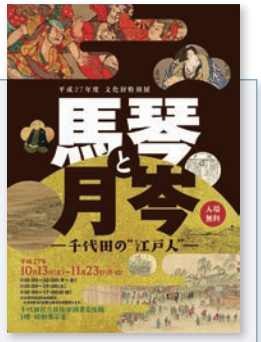
平成26年度

2014/07/22-08/31
特別展
千代田の坂と橋
―江戸・東京の地形―



2015/07/21-08/09
企画展
学童疎開からみる子どもたちの生活

2015/10/13-11/23
特別展
馬琴と月岑
―千代田の“江戸人”―



平成27年度

新発見の
「江戸始図」を公開

2016/12/05-2017/02/05
特別展
発掘された大名屋敷
—殿様と勤番武士のくらし—



2017/09/19-11/19
共同企画特別展
松江城と江戸城
—国宝になった城と天下人の城—



平成28年度　平成29年度

初の館外での展示開催

2019/07/17-08/25
ミニ企画展
日本橋川と大名屋敷
—新発見・一橋徳川家屋敷跡—



2018/10/05-12/02
特別展
江戸から東京へ
—江戸城無血開城から東京の新たな幕開け—

2018/05/19-07/01
千代田区×東京ステーションギャラリー
共同企画特別展
夢二繚乱



平成30年度

令和元年度

2020/01/18-03/08
特別展
江戸の人びと、本をたしなむ



イメージキャラクター日比丸誕生



江戸の書物をテーマにした特別展のナビゲーターとして誕生。江戸時代にベストセラーとなった曲亭馬琴『南総里見八犬伝』の表紙裏に描かれた、犬のイラストがモチーフ（15周年期間中に常設展示室で実物を展示／詳しくはp.4右下参照）。
非公式キャラクターながら、現在も常設展示などで活躍中。

コロナ禍により展示中断


展示風景

2023/01/07-02/28
企画展
龍星閣がつないだ夢二の心
—「出版屋」から生まれた夢二ブームの原点—



2021/07/17-09/19
特別展
紀伊国屋三谷家コレクション
浮世絵をうる・つくる・みる



令和4年度　令和3年度

竹久夢二生誕140年・没後90年記念

2023/09/01-11/26
特別展 関東大震災100年
首都東京の復興ものがたり
―未来へ繋ぐ100年の記憶―



2024/11/02-12/15
特別展
夢二式モデルルームへようこそ!
―夢二好みの室内空間―



令和5年度 ／ 令和6年度

2025/10/01-11/09
企画展
千代田の大奥
―時代へのまなざし―



13年ぶりに大幅リニューアル!



2025/02/08-03/24
特別展
実録 桜田門外の変



令和7年度

2025/12/06-2026/2/23
特別展 昭和100年
THE SHOWA MUST GO ON
―昭和という舞台を観に行こう―



2026/08/29-10/18
特別展
発見された東京の化石



2027/02/06-03/22
企画展
千代田といえば○○?
―全て見せます、区指定文化財―(仮)

令和8年度 ／ 開催予定

この15年間、コロナ禍による展示活動の休止もありましたが、多くの資料保存機関や関係者からの協力を得ながら、継続して特別展・企画展を開催することができました。これからも魅力ある千代田区の歴史や文化に関わる特別展・企画展を開催していきます。

なお、日比谷図書文化館開館15周年を記念し、10月31日（土）より、「江戸文化を今、楽しむ」を共通テーマに、館内の各フロアで様々な展示や催しを予定しております。これまでに当館で開催した特別展・企画展のポスター展（特別展示室）や、江戸の出版文化を紹介する「江戸の出版あれこれ」（常設展示室内）、館内をめぐるスタンプラリーなどもありますので、15周年を迎えた日比谷図書文化館にもぜひお越しください。

（学芸員　篠原杏奈）

関連情報

日比谷図書文化館
15周年企画（常設展示室内）
「江戸の出版あれこれ」

江戸の文化として代表される出版文化について、常設展示室（Ⅲ室）で掘り下げて紹介します。



日比丸の元になった『南総里見八犬伝』挿絵

あの人も千代田区を歩いた～夏目漱石編～



夏目漱石の肖像
出典：国立国会図書館「近代日本人の肖像」
この写真は千円札に使われた写真と同日、
明治天皇の大喪の折に撮影されたものです。



書影『三四郎』（復刻版）、
日比谷図書文化館蔵

常設展示室では10月20日（火）から12月20日（日）まで令和8年度テーマ展2「あの人も千代田区を歩いた～夏目漱石編～」を開催しています。

昭和世代にとっては、千円札の肖像画の人というイメージが強いのではないでしょうか？現在は北里柴三郎、その前は野口英世、その前が夏目漱石です。夏目漱石の肖像画が使われた千円札が発行されていたのは、昭和59年（1984）11月1日から平成19年（2007）4月2日までです。実は発行停止からほぼ20年経っています。今回のテーマ展では、今年で没後110年となった文豪・夏目漱石について紹介しています。

夏目漱石（本名・金之助）は慶応3年（1867）、現在の新宿区喜久井町に名主・夏目家の四男として誕生しました。その後、一時期塩原家へ養子に入りましたが、夏目家に復姓します。その間に内山下町（現内幸町）の府立第一中等学校（後の日比谷高校）を経て、帝国大学（後の東京大学）に入学しました。大学卒業後は、英語教師として愛媛、熊本に赴任。その後、政府の国費留学生に選ばれ、ロンドンに留学します。

帰国後は帝国大学で教壇に立ち、多くの学生に影響を与えます。そうした中で、明治38年（1905）に高浜虚子の薦めで書いたのが『吾輩ハ猫デアル』です。この作品は虚子が刊行していた『ホトトギス』に掲載されると、たちまち大ヒットとなり、夏目漱石の名が一挙に知れ渡ります。その後も、『坊ちゃん』、『三四郎』など数多くの作品を生み出し、やがて帝国大学を辞し専業作家として小説のみならず、演劇評論・講演会など多面に活躍していきます。大正5年（1916）、早稲田南町の自宅で家族に看取られながら死去します。

さて、漱石所縁の地と言えば、生家と漱石山房が所在した新宿区や、正岡子規とも暮らした愛媛県松山市が有名ですが、実は千代田区にもたいへん縁の深い作家です。例えば、飛び級して卒業した小学校はお茶の水小学校の前身である錦華小学校であることや、入院した長与胃腸病院が内幸町にあったこと。また、神田にあった寄席や、三崎座や能楽堂、帝国劇場などへは度々観劇に出向いています。作品を読んでも、麹町区や神田区の地名が色々と出てきます。漱石の文章からは、明治・大正の千代田区の風景が浮き上がってきます。



絵葉書「帝国劇場」、明治44年（1911）竣工
漱石は帝国劇場の開業式に招待され、以降も足を運んでいます。
演目については気に入った時と気に入らない時があったようです。

本展示では、改めて今も色々な人の心を捉える夏目漱石という人物とその作品を、東京市立日比谷図書館（明治41年開館）の旧蔵書などから紹介します。また、漱石夫妻の新たな姿を描き出したと言われる小説、伊集院静『ミチクサ先生』の直筆原稿（千代田区蔵、文化財ニュース38号で紹介）を初公開します。漱石を通じて、近代の千代田区に思いを馳せていただければ幸いです。

※開催にあたっては、新宿区立漱石山房記念館から協力を賜りました。
この場を借りて、御礼申し上げます。

（学芸員　井坂綾）

内幸町一丁目遺跡から出土した松香渓焼

今回紹介する資料は、令和５年（2023）12月から令和６年（2024）７月まで実施した内幸町一丁目遺跡の発掘調査で出土した松香渓焼の碗・皿・鉢です。松香渓焼は全国的にも出土事例が少なく、これまでのところ、この調査地を拝領していた小城藩の国元である佐賀県小城市の発掘調査でわずかに確認されているのみです。

出土した場所について

松香渓焼が出土した内幸町一丁目遺跡は、千代田区内幸町一丁目の日比谷公園から東へ約200mに位置します。縄文海進後に形成された日比谷入江の一部にあたります。周辺は近世初頭に行われた埋立てによって屋敷地化され、本調査地点には、肥前鍋島家の中屋敷が置かれていました。後に支藩である小城藩がこれを譲り受け、居屋敷として利用していました。



図１　調査地点図

松香渓焼について

松香渓焼は、小城藩の統制のもと、贈答品などを専門に生産した御用窯の製品とされており、藩が主体的に関与して始めた事業であったと考えられています。開窯は享保10年（1725）頃とされますが、廃窯時期を示す明確な史料は確認されておらず、現在のところ宝暦年間（1751～1764）頃と推定されています。

製品はロクロ成形を主体とし、一部には型打ち技法を用いたものも確認されています。器種には白磁、染付、青磁、青磁染付などがあり、なかでも松香渓焼を特徴づけるものとして、二重角枠内に「松」の字を記した「角松」銘が知られています（写真４）。

伝世品は現在５例が確認されていますが、そのうち４例は現存していません。残る１例の「染付蓬莱亀文大皿」は窯元の小城市重要文化財に指定されています。

伝世品は極めて少ない一方、近年、小城市内の発掘調査によって複数の出土例が確認されています。これらの出土品は、全体的に灰色がかった素地をもち、青みを帯びた透明釉が施されている点に特徴があります。



写真１　発掘調査風景



写真２　石組構



写真３　本遺跡で出土した松香渓焼

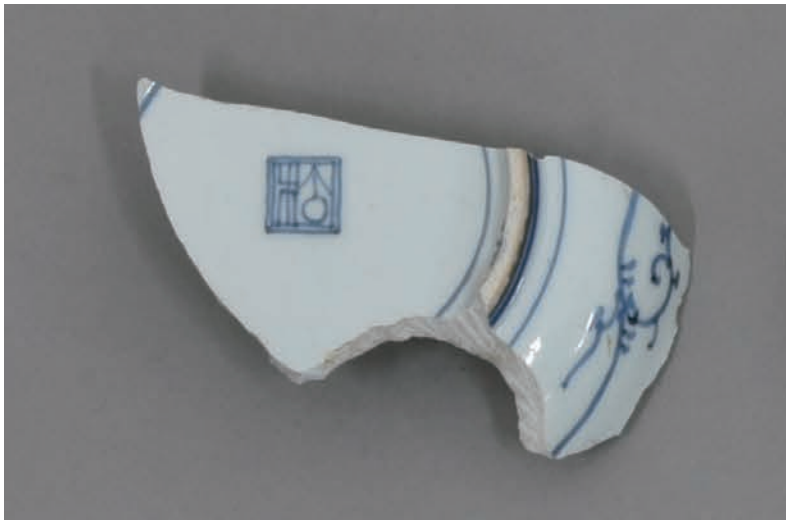


写真４　「角松」印



写真５　左：牡丹文　右：毬栗文

出土した松香渓焼

内幸町一丁目遺跡では、小城市の出土品と類似する製品のほか、腰折形の碗や「角松」銘を有する磁器が16点出土しました（写真3）。いずれの資料にも青みを帯びた透明釉が施されており、松香渓焼の特徴をよく示しています。

写真５で示した碗には、外面に牡丹や毬栗（いがぐり）などが描かれています。また写真３上部に掲載されているものは、内面にも花文などの文様が施されており、本遺跡で確認された出土遺物は内外面ともに草花が施されていました。国元の小城市での発掘調査で出土したものにも、同様な草花が描かれた製品が確認されています。

出土遺構は17世紀後葉から19世紀後葉までの土坑の遺構を中心として幅広くみられます。しかし、松香渓焼を生産した窯は18世紀後葉までには廃窯になったと考えられていることから、19世紀以降の遺構から出土した資料については、後世の混入、あるいは屋敷内で伝世・保管されていたものが廃棄された可能性が考えられます。

一方、17世紀後葉から18世紀中葉にかけての遺構・盛土から出土した資料は、窯の操業時期と重なります。さらに、出土地点が藩士の居住空間に近接しており、一緒に出土した遺物として、生活雑器が多く確認されています。これらを踏まえ、松香渓焼は藩士の日常的な雑器として使用されていたと考えられます。

本遺跡から出土した松香渓焼は、小城藩の国元で生産された製品が江戸の藩邸にもたらされ、実際に使用されていた可能性を示す貴重な資料です。全国的にも希少な出土例であることから、今後の研究の進展が期待できます。

（学芸員　山田　暁也）

こんなこともやっています～文化財調査報告書の刊行～

文化財事務室では、「文化財ニュース」や特別展・企画展の図録や研究紀要の他に、文化財調査報告書の作成・発行を行っています。これまでに、『原胤昭旧蔵資料調査報告書』や『江戸城本丸・西丸御殿建築図面史料』など様々な資料を取り上げて刊行されています。（右図）





※画像はイメージです。

判型：A4判
頁数：160頁
頒布価格：未定
編集：千代田区立日比谷図書文化館
　　文化財事務室
発行：千代田区教育委員会

令和８年度は令和６年度に区指定文化財となった「水野勝邦関東大震災アルバム」の調査報告書を刊行します。近年、写真資料はアーカイブスとしての価値を認められ、近代を知る上で重要な資料となっています。本書で扱う「水野勝邦関東大震災アルバム」も、被災地を見た風景を、ありのままに残しています。

また、本書にはアルバムに収録された写真の画像だけではなく、様々な見地からの論考を収録しています。文化財の概要だけではなく、当時の写真技術や関東大震災研究についても収録した１冊になっています。

文化財調査報告書は郵送でも購入可能となっています。販売方法や既刊情報は、ホームページ「千代田区の文化財」（下記QRコードからアクセス可能）からご確認ください。

（学芸員　井坂綾）



東京メトロ　● 千代田線
　　● 日比谷線　―「霞ケ関駅」徒歩５分
　　● 丸ノ内線
都営地下鉄　● 三田線―「内幸町駅」徒歩３分
駐車場　当施設に駐車場はありません。

開館時間　月～金　10時～22時
　　土　10時～19時
　　日・祝　10時～17時
文化財事務室　月～金　10時～18時

文化財ホームページ

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
　最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日　毎月第３月曜日

文化財ニュース　第40号　（3,000部）
発行日　令和８年10月30日
編　集　千代田区立日比谷図書文化館　文化財事務室
　〒100-0012　東京都千代田区日比谷公園1-4
　TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361
　https://www.edo-chiyoda.jp
発　行　千代田区教育委員会
印　刷　前田印刷株式会社